

手足口病・りんご病

軽病疾患も合併症には注意

もとはしクリニック

本橋和夫 先生

手足口病は、手足の水疱と口内炎を生じる病気で、多くは夏に流行します。数種類のエンテロウイルスがこの病気を起こすため、一生のうちに何回も罹患することもありますし、流行する年によって病気の重症度や合併症が異なることがあります。

潜伏期は約5日。唾液、糞便に接触した人の手から口への糞口感染型ですが、飛沫感染することもあります。

皮膚の水疱疹は痛みを伴わないので親が気付かないことがあります。これに対して口内炎は痛みが強く、乳幼児では食欲不振や哺乳不良が起こることがあります。

手足口病は今までは軽症の疾患でした。合併症としてごくまれに、髄膜炎、急性小脳失調症と軽度の脳炎が知られていましたが、致命的ではなく、後遺症も認められていませんでした。

しかしながら、1997年のマレーシア、1998年の台湾で、手足口病による脳幹脳炎という合併症で急死する例が多数みられました。まだ国内ではこのタイプの手足口病の流行はありませんが、注意の必要なウイルス疾患になってきています。

りんご病は正式には伝染性紅斑といい、ヒトパルボウイルスB19というウイルスの感染によって起こります。潜伏期は3週間前後で両側頬部の平手打ち様・りんご様のびまん性紅斑、躯幹や四肢のレース状・網目状に例えられる斑状紅斑が特徴です。けれどこれらは、このウイルス感染症の回復期にみられる症状で、言い換えますと「これから治りますよ」とのサインになります。ウイルスの活動は感染後5～14日が活発になり、この時期に発熱や関節痛というインフルエンザ様症状がみられることがあります。飛沫により感染がおこるのもこの時期と考えられており、紅斑出現時に他人に感染させることはないようです。

りんご病は予後良好な疾患なので、無治療で経過観察されることの多い病気です。